



奇說排悶錄前集
四

特別
21
2460
4



尾定

奇詭排門録卷之四

友愛之部

目錄

張誠

武君仕

達州民

仇大娘

童氏犬

合五種

非門録卷之四

2460
12-4

奇説排門録卷之四

友愛之部

張誠

六樹園翁 譯

豫人^{今豫國}張氏^{其先}齊人^也。齊國の靖難兵^起齊
 大亂^{齊國兵}妻^{八兵}掠^めて去^りて去^りて張氏^常豫^國遊^びと
 知る人^多り^るを遂^に引^移り住^り。叔^妻を娶^ひて子^を生^むる^に納^り
 と名^づる^に。幾^ももあ^らず此^の妻^を死^する^に又^も繼^室を娶^ひて此^の妻^も亦^も男子^を
 生^むる^に滅^せと名^を呼^ぶ。繼^室の牛^氏あり^て性^悍ゆ^りと納^りを嫉^むる^に
 甚^く。奴^の如^く此^を使^て日^々柴^一荷^を伐^らせ^り少^しけ^り鞭^うち^て罵^る
 莫^く常^らる^に滅^せめ^り甘^脆を隱^し蓄^へ置^て食^はせ^り又^も師^を從^はせ^り書^を

讀せらるると。誠漸長くと親の孝をう。兄を敬へ。兄ある訥が苦
 める。衆忍びど。陰の母を勧む。も聴事無し。一日訥山へ入と柴を伐と
 未終らざる。大なる風雨。値と。薪を負く。帰る。母を母。薪少と
 云と怒。食を與へ。訥泣く。室へ入と。臥居ぬ。誠師の家へ。帰来
 と。兄が愁。色を見と。病め。やと問へ。兄。餓と。云入。其故を問。兄
 斯くと告。誠聞と。公苦。か。暫。わ。餅を懷。来と
 兄。與。兄。い。持。来。つ。と。問。我。竊。小。麥。の。粉。を取。往。と。隣
 婦。を。借。く。作。ら。め。先。食。と。よ。斯。と。言。る。の。事。と。云。訥。之。を。食。て
 弟。の。囁。と。曰。此。後。斯。る。の。為。さ。若。事。泄。ら。ば。汝。を。累。せん。我。一。日。の
 一。度。食。せ。ば。飢。ると。も。死。す。る。中。々。至。ら。ず。誠。曰。兄。の。故。と。身。弱。く。び。せ。ば

馮の柴を刈玉へんと云と。其次の日竊山へ赴と。兄が樵を斫所
 至る。兄見と。驚と。汝来と。何を。為。と。問。を。答。と。曰。木。伐。樵。を
 助。え。と。兄。曰。誰。汝。を。遣。へ。と。弟。曰。我。自。来。と。兄。曰。汝
 い。ぐ。薪。を。樵。る。の。成。り。え。ん。や。縱。あ。は。能。と。も。猶。不。可。あり。速。に
 歸。ま。べ。と。云。へ。と。誠。聽。と。ぎ。と。柴。を。斫。と。兄。を。助。と。明。日。ハ。斧。之。指
 と。来。ん。と。云。入。を。兄。之。を。止。め。と。弟。指。を。見。と。血。出。と。履。も。穿。と。り。
 兄。悲。と。曰。汝。速。に。歸。ら。む。ん。ば。我。斧。を。以。と。自。到。と。死。ち。ん。と。云。と。兄。
 誠。是。非。多。く。歸。る。兄。之。を。半。途。や。と。送。と。再。山。へ。歸。と。樵。を。斫。歸。
 時。誠。師。の。家。へ。至。と。曰。吾。弟。切。け。ば。能。之。を。用。玉。ひ。と。山。へ。入。る。度
 を。止。め。玉。へ。虎。狼。の。恐。と。あ。と。と。云。へ。師。言。ふ。午。前。何。く。へ。往。と。る。故。に

早竹古く折檻し一と云々。訥家小帰やそく、城小謂々吾言
 を聴きしと師の台を受ふると云々。城尖とあるるのうと父兄
 城翌日斧を懐めしと山小入来ぬる我兄兄と駭之曰。我汝小采ると
 勿と云つる何ぞ又来ると云々。共城應へむと薪を刈る。殊小
 怠と其業をるせむ。汗流と頭よを落し。漸しく一束とありと
 辭せむと返す。師の家小至む。師責る事昨日の如し。城五
 の俣小告々ま。師も其賢る我嘆と。是るを山小往くを禁せむ。兄
 屢止めよと云へ。聴きしと日々山小来多。一日數人と山中の熊を
 居る小歎と虎走や来けむ。衆人惧と伏し。中へ虎滅を啣と
 往さぬ。原来虎の人を負と行へ。緩死のめゆ。訥小追つ。是ぬ。此時訥力と

出り斧を虎の膝小投々。虎痛と狂ひ奔やそく往く。之を追ん
 とととと及ぶ。及ぶと訥虎を見失ひと返り来ると哭と弟
 我為小死しぬ。我何ぞ生むと云と。斧を取と自刎んと。衆人急
 き忙と留々せむ。斧の刃一寸計肉小入と血流る事漏が如し。衆駭
 と其衣を裂と割口を包む。扶と家小帰。母泣と訥を罵と曰。
 汝吾兒を殺せむ。然る小聊頸小割を付と。責を塞んと。とるやと云
 訥呻つと。母人煩悩と至る。死せむ。我いさく生と。わらんと云
 其割痛と眠る。能へむ。昼夜壁に倚と坐と。哭を父へ此も又
 死らんと恐と。時と楯小就と少と。哺小を牛氏見と。諾責と。ハ
 納遂小食せむ。三日ありと。斃と。ぬ村中の巫あり。常小冥土小往來と。

者ありて。訥夢おちりぬ之の遇と。弟が行方を問ふ。巫我聞事ありとて。訥を導く。往時一皂衫を着る人の城中に居るあり。巫此人に向て。城がら我問ふ。皂衫人佩る囊の中より。牒を取出し見せ。三日の中。男女死せる者百餘の中。張氏ある者あり。と云。巫疑く。若他の牒の内。ぬやあると問ふ。皂衫人の曰。此筋ハ我支配るや。何ぞ差ふ事あるん。訥信せざり。とて。巫を強く。城中へ入せ。見せ。城中皆死失せ。者汝を往來し。とて。あやの故識する人。汝死すと。就く。弟を問ふ。未だ見せ。といふ。時。訥諱く。菩薩至り。玉へ。と言ふ。見せ。空中。偉人あり。毫光上下。不徹せり。巫訥を挫く。跪く。衆鬼。騰る。声地を震はむ。菩薩揚。枝を以て。徧甘露を洒ぬ。其細かるる。塵の如し。俄に。とて。かた消す。

如く失せり。訥我割の上。露をうら。よむ。痛を忘まぬ。巫又導て。俱に帰す。来ぬと。覺え。死。二日。あや。とて。竟に。魁々。父母。向ひ。とて。見せ。所を告ぐ。誠死せ。とて。在り。とて。母。あや。造り。言。あり。とて。云。とて。又。罵。辱。訥。割。痕。を。損。ま。む。良。小。瘡。を。力。と。起。出。く。父。を。拜。し。とて。曰。我。今。う。ま。と。ま。と。雲。を。穿。ち。海。へ。入。り。滅。を。尋。ね。ん。と。も。弟。小。逢。る。と。み。我。再。帰。ら。ん。願。へ。ん。父。兄。を。以。て。死。せ。り。と。思。ひ。玉。へ。と。云。へ。を。翁。人。無。所。引。往。と。共。小。泣。と。別。ま。ぬ。其。う。ま。と。普。此。處。彼。處。と。尋。あ。り。ぬ。と。苦。田。へ。盡。ま。ま。と。乞。巧。を。う。ま。と。行。々。の。年。を。逾。く。金。陵。地。小。達。を。け。り。衣。ハ。皆。敝。ま。を。て。道。の。傍。小。背。を。曲。く。物。を。乞。あ。り。き。々。の。小。官。長。と。見。え。と。人。數。多。具。し。く。馬。曳。せ。く。過。る。人。あり。訥。走。り。く。則。小。避。居。け。り。其。中。小。駒。小。

乗る一少年あり。屢訥を顧み玉へ。訥其貴公子あり。以て仰ぎ
 視る。少半の入馬を駐めと下り來て呼ぶ。吾兄あり。あむむ
 やと云へ。訥首を卷く。審み視む。誠あり。嬉しく走りて手を取る。声
 かく計泣く。誠も泣く云々。兄何漂落し。斯ハ成玉へ。訥其
 情を言々。誠益悲しく。官長命づく。訥を馬に
 載せ。誠と轡を連移り。歸玉の初山中。虎の啣去る。時いづる
 る。ふりつと。路の側。捨置ける。誠も知らず。氣を失ひ。一夜
 臥居る。適張千戸と云人。都る來て。此を過る。其貌文あり。誠
 んと憐れ。介抱させ。漸く換る。扱載り。共歸
 傷處を療治させ。六日を経。全く痊る。千戸子無り。是ハ

誠を子と云り。今日誘はま。物見の出想は。納め逢る。誠
 誠道と云。次第を逐一。訥も居る。斯く千戸。納め對面を。訥拜
 謝しく。已やむ。誠帛衣を捧ぐ。兄の進め。酒を設く。物語を。千戸
 問ふ。貴族の豫名。めり。幾とぞ。訥曰。親族あり。父ハ
 原来存名。入る。流寓し。今豫め止る。千戸曰。僕も亦存
 人あり。何の里の居る。答曰。曾父の言を承り。東昌の
 轄に属せり。と云。候ひ。千戸驚馬と。曰。さて。我同郷あり。何の故
 小豫め。移らむ。訥曰。前母兵の。こめ。掠め。去ら。家ハ。火。焚
 是家産を失。一時先。西道。各の賈し。往來。熟せる。所あり。遂
 小彼。止。候。と云。千戸。い。千戸。い。敬馬。君。父。の。名。い。んと。同。入



長誠の為に
山中の樵を
不意に
虎に啗らる



訥之を告まふ。千戸はさうく顔を視て立くと内へ入る。何をも
 尋ねて大夫入出と訥の向くと曰。汝は是張炳之が孫なりや訥然と
 答ふ。大夫入出を目の受と千戸の向ひ此汝が弟なりと云訥兄弟
 其意を解する事あり。大夫入曰我汝が父の嫁と云三年ぬと流
 離しく北の玄と。身指揮下智の何某の属と云半年ぬと汝が
 兄を千戸を生めぬ。又半年を過しく指揮死ぬ汝が兄父の蔭と云
 此官の遷り。今任を解り我常々郷里を念と屢人を遣と齊西の豫國に
 いらむと云も不見る所あり。何ぞ知らん汝が父西の徙まると。
 と云と始終を詳の語らる齒を以て序まふ千戸四年と云最長
 誠十六歳ゆ最少年なり。訥八年二十のちと云仲むぞるりぬる。

千戸兩人の弟をえと惟るのむらうと云ふと共の臥處を同くしと
 朝夕親睦する。叔共の帰るを計を作ると時大夫入牛氏の容と云
 する。大夫入の張氏が妻ありと云今今妻と云。千戸曰聴し正々共の
 住む。否玉の家を折つぬ。天下豈父無の困あらんやと云。是は於
 と宅を鬻き装を辨と。日を撰と西至る。豫國へ小趣なり。既其里に抵
 ます。訥誠死と父の報と父の訥が云と云。妻も尋と死と唯
 一人ありと影とる。外の伴ふ人も無と云。小想を存と訥が至ると云。死
 と喜ぶるの限あり。其終と云と云。死せりと想ひし誠も帰來を
 愈敬馬喜と物ものいふと云。はと云。程もあると云。千戸母子至ると云
 告ると云。翁涕を輟ると云。わたりと云。喜もあると云。悲もあると云。

立ちまゝひとぞ居る。千戸の八と父を拜む。大夫人の翁に向ひて哭
 より外る。此時媪婢斬卒入来と内外の壁一々を翁の家内居
 わる。庭のわたりやむく立ちまゝ居る。誠母をえんごまへ父の同
 けふ死せりと云へば涕断と問絶しく斬ぬ懸る。千戸財を出しと
 樓閣を建つ。師を招く。兩弟を教させちると。馬の槽めをり入
 室の満さぎと。あつらふ大家の風で備で居る。

武君仕

河南消川名の人の武君仕と云人あり。其兄の君相と云る。少して
 縣尉の代官の燈籠夫とす。尉怒るるを責むるを責むる尉に向
 曰。丈夫の殺まへし辱むるをむと云る。遂めまゝ軍に従て往るが。

ヨク戦の功あり。君仕の驃騎將軍の名に至り。君相の遊撃將
 軍の名に至り。君仕嘗て孫可望が敵軍數十萬に對し。軍
 騎ゆく二十餘人を率と陣を陥る。敵敢と逼らむ。兩翼の
 を張と之を圍め。一騎還来と君仕已れ。王と告げれば
 君相聞もあざ稍を奮と賊軍を走せ入る。賊恐と近る者
 る。君仕賊を數多殺し。後より出づ。君相の斯共知らむ。東西の警
 と廻る。君仕も兄が出づ。復馬を躍らんと陣入ると。兄弟
 兩騎數十萬の賊中を突くと回る。賊皆聲を奪と。真の漢子を
 る。ちりと答へけ。又一日君仕賊と戦と。飛礮の中ら。血流と。面
 む。即馬上に在ると。帛を裂と。之を畏と。礮を飛せると。賊

生擒と帰す其腦を食たり。其勇敢此の如し。嘉善地の徐岳と云
人此傳を書き徐岳を見聞録に載あり。徐岳此君仕と同年ゆと突
亥の生ありたり。一日燕坐し君仕が臉上の青癩をえと。何ぞ斯
累くこの所と問ふと。君仕徐岳がひを引く之を按せたり。内々皆
細る鉄珠子あり。又衣を掲て腰肋の間を示す。鉄珠大く垂るあり
背上傷痕鱗の如し。徐岳も興あり。實に百死の中を経る男あり
けり。とぞ感とる所。

達列民

四川の達列細の民某と云者。兄弟二人甚友愛せり。弟等と空成
娶らざ他あり。有るふ其兄身を賣と十二金を得と。弟の為に

婦を娶らんとし。聘を遣たり。弟歸りて婦を娶り。兄が身を賣
るの事知と兄と相持と泣き。とて其婦を母の家へ遣と。原の聘金
と取り。兄の身を贖へんと。湖南地の流民人。二人其事を知と。
婦の尾と往と中途中婦を殺し死し。其金を攫と去らんと。其
俄に迅雷大震。二人を殺し。其尸共婦が家の門
前。跪と。中々十二金をおと居り。頃ありと婦復甦と其家へ歸至と。
二人の者早門外へ跪と。有る。婦其故を語り。けし。兄弟の
よと。鄰里列人來と。觀る者堵の如く。嘆と。異とせざる者無し。
仇大娘

仇仲ハ晋名の人あり。其郡邑を知らざ。世の亂に遇と。寇賊敵のあり

倭へらと。挈らんと。往ぬ二人の子あり。兄を福と云ひ弟を禄と云と
 共初。継室ハ邵氏あり。二人の子を愛ま育てんと。幸ハ貴業
 全くと。飢寒の憂あり。然るも連年飢饉うち續々上ぬ。豪
 強ある者女主人を疾侮と。無理をえりかよめ取る事。一仇ガ
 叔父尚廉と云者あり。其嫁せんるを利と。屢勸まを。邵氏
 志を夫と揺うと。邵氏尚廉利を貪らんとす。尚廉陰めり大姓を金
 を取て券を遣と。邵氏を強と大姓を送らんとしける。又茲ハ同郷の
 人の魏夙と云者仲と昔より不和あり。仲ガ妻の邵氏寡と
 成ると見と。さるる言を造りて言弘と。大姓聞と邵氏と
 不徳ありと嫌と迎る夏を止る。邵氏漸ありと聞知ると共寛と

述る小所あり。獨うち歎と朝夕涼を隕し居る。病と成
 と四躰自在と。床榻の臥居る。福年十六ハ成けと急死
 婦を娶らせり。妻未だ女。秀女前。ちる肥膽ガ女あり。性賢能ハ
 経紀ハ賢く。家中心めく。裕あり。弟の禄をた
 師ハ従へせと書を讀せり。魏夙の忌嫉と。陽ハ睦くと
 頻ハ福を招と酒を飲せと。其間ハ乗と。曰尊堂病玉と。生産
 を理る事能ハ。弟坐ち。食と。且婦を取ら。大耗と云
 君ガ為ハ計る。早く家を折んぬ。如と勸む。福歸と婦ハ
 謀る。婦あり。死事ありと叱り。母ハ吉ぬ。母怒り。詬罵ハ
 福も下ハ志と。輒家ある金銭を他人の物の如く思ひ。漫ハ之成

遣入魏夙之を誘と博賭をさせせざる。倉の粟漸空く成と糧
 も絶る。幸小姜女賢めと飯を炊と母の仕ふ。福家を分ちとら
 益憚と博賭をす。數月の中田産悉債は取ら計をち所免
 ぬ至まる。因やと妻を券とす。財を貸らんと是共承引する者
 無し。邑人趙閻羅と云者。の網を漏る巨と益ちりたる。是を
 彼と心よく賞をせと福假々。數日めと又之を夫へ。券の
 盟小背るとせ。趙目を大きく成と責々。福大の惧と妻を
 賺と趙宅へ遣り。魏夙やと竊小喜び急奔と姜家小告
 つ。其意ハ仇氏の家を敗らんと。姜秀才怒と之を官小訟。福惧

る甚くはと行方無あり。姜女趙家。羅小至と始と皆小欺
 うと。然知と。大小哭と死せんと。趙慰め諭せと聴と威
 を以と逼と益罵る。怒と鞭うと終小服せと。并を抜と自喉
 を刺ぬ急と救と共。己小狼管小透と。血溢と出る事。怒と
 趙帛を以と其頸を束ぬ。猶冀ハ從容小之をる。必と。然
 往たり。官女の傷の重を驗玉ひと。命と。趙を。小謀相共
 小目をさせと。更小刑を用ひと。趙官。趙閻羅が横暴を人く。空
 居々。大の怒と家人を喚と。立と。小捷と。敵死と。姜
 氏。小女を昇と。家小歸と。姜が訟と。成と。邵氏始と。福と。不肖

外より治る母の心大の慰も病も漸瘥る小至まると。家務ハ悉大娘
 小委ねる。理中の豪強少く凌暴せんとまま大娘刀を取て其家
 又至り争ひ論じく屈服させし事なり。斯く年々ちち田産日
 小増豊ふちり多。時々藥餌珍奇を買て美女のゆえ魏王遣多。
 又禄が長成せるを見と頻々媒小囁し。之が為小婚を不見めんと。魏
 夙人小告と曰仇家の産業悉大娘小属せり。恐らくは將來復返下
 と云ま。人皆之を信しと婚をせんと云者ありける。此小范公子
 子文と范公子文ハ云入人有。家中小名園あり。晋第一なり。晋の中なるか
 園中の名花路を夾て直小内室小通せり。或人知らざりて誤りて園小
 入公子の私宴の處小至りけり。怒りて執へて盗ありと云。杖ぬり

死ぬる打しめ。事あり。時小清明とて三月の節あり。禄師の家
 小ゆも帰りてくる。魏夙誘て共小遊びて彼園の所小至りぬ。魏のよ
 園丁を相知りてけり。園中へ入りて多。周く亭榭を人小所集也和名
 曰臺有屋曰榭和名ウチナ。歴て一處小至りて。溪水小勇しく画橋朱檻
 ありて一の漆門小通せり。庭の門内を望めば繁花錦の如し。是公子の
 内齋あり。魏之を給て曰君請先入。我彼處めと漏れしと往ん
 とて別はぬ。禄心つとて往くる小一院あり。女子の笑声聞こ。一人の婢
 小く窺見と即返入ぬ。禄始と駭奔らんとままハ公子出来と家人を
 叱りて之を逐ふ。禄大に窘らんとせり。せんま無く。自突中の身を
 投ぐる。公子怒を返しと笑とる。諸僕小命しと引かさせ。其容の都雅



萃本繡像模寫



大娘
 躬往之
 沈家の
 衰之
 救ふ

入贅と成事能へどと云ふ公子姑歸と謀り王へと。遂に園人を遣
 して湿衣を負せ。馬に乗れ歸りて。禄歸り來と母告げし。母
 敬馬と余アあるの不祥とを。是れ至りて始と魏氏が公の恐し死
 を知りぬ。さきも凶凶因りて吉をえし。其後おさし置と。斯る者
 遠ざかりと交る夏勿とと母戒る。數日を踰と公子又人を來ら
 しめと母お言ハし。母終らるけがむ。大娘之を應と即二人の媒を借
 り納采の禮を有。日を撰と公子の家へ入贅とらる。年比有と禄
 學問の長才名も世に聞えり。妻の弟生長しけむ。惠娘が弟生長
 禄婦を携と家へ歸りぬ。母病少く息と杖を倚と歩行せり。大娘
 の經紀頼と第宅も完る上。新婦へ來と婢僕雲の如く。さきより

大家の風ありけむ。魏之をえと益嫉めども害を送るをえり。時
 巨盜あり。事発と遠地へ遣りて。禄財を倚とと誣と。魏が計る所ありと。禄の関外へ。徒さるをえり。田産の
 盡没收せしと。官庫へ入る。范公子上下の賄と。僅に惠娘を免
 せり。幸に大娘産を折の書を執りて。官へ申しと母子を免
 せり。新に増せる良田許りの。采福が名ありけむ。母女始と安
 居る事を得り。禄又え返るや。身ありと思ひけむ。離婚書を
 寫と岳家へ遣り。獨北都をゆと。往々旅肆の戸外。不巧子の乞
 乞とをえり。貌よく兄に類せり。近づくと問果しと。兄弟相共
 めり。取と有し。さる。若りて位り。禄衣を

解金を分て福小與へ早く家小歸り玉へと言ひ福之を受て泣々
 別ぞ往々。禄の關外小至と將軍の帳下小
 一卒と成しが文弱ちまば文籍のる成主ぞうしめ諸僕と同く棲
 しむ。僕が輩相共小家世を研問夏る小禄悉之を告るまば内一人
 驚く是吾見ちるると云ふ。是ハ父ある仇仲る初め殺小
 捕ら馬を救と有しが冠逃竄去と後遂小關外小徙と將軍の僕
 とあるとけり。禄に向と其由を語まば始と真の父とるるの成知と首と
 抱と悲哀し且相喜る。幾くもわくく將軍巨盜數十人成獲
 けり。内の一人の曩の時魏小頼りと禄を誣る次血斟るりるれ心。父子泣
 泣將軍小泣る。將軍之が為小冤を雪に上聞小達しけり。上より地方官

命せとと。没入しる仇氏の田産を返し玉へる仇父子喜ぶ事
 限る。禄々旅装をして歸りて。叔兄ある福小弟小別とて。家小
 歸り蒲伏しと入る大娘母を堂上よ坐せしめ杖を取と福小向と曰
 責を受んる成願つ姑留むる。然るぞんを早去る。福泣と地小伏
 願く々答を受んと云大娘杖を投すと曰婦を責程の人あるを
 懲むも足ら。宿案未消せざるるまば若再犯まば官よそて首先
 とく。即人を遣と美女小告るとまば美女罵と曰我を仇氏の何人と
 必ひ玉ふふろ。あつる成聞知るしとぞ云る。大娘此の成折と言とて
 福をあげけり。あつる福慚と敢と言るる。居る事半年なり
 大娘福小衣食等を恵むるハ丁寧とまば。役をさしむるもの

僕と同じくせむ。福出精しくいさう怒める色あり。金錢をわつゝまを
 共聊も苟あらず。大娘其他無き察しと母白し。姜女を求め
 と復歸せしめんと云ふ。母恐らくたひ返し難うんと云へ。大娘
 曰然も彼女。二主は事る心わづら。曩は自害とぞ死理あり。然も
 福小賣とるるの念る公無き非トと云と。大娘遂に福を率と。
 躬往と負荆をちむ。岳父母きびしく福を責とをせ。大娘叱と張
 跪せむ。斯と姜女小見えしめんととる。再云へ共女出む。大娘内
 小入さぐ捉と之を出せ。女福をえと罵と責む。福けよむととく
 居る不堪む。姜が母始と福を曳と起と。大娘歸るを日をもつ女
 が日向小姉の惠を受へ。事厚し。今尊命を受と。豈異言あり

や但恐らく此入欺ざるの公を保つる能へ。且恩義已に絶しと
 何ぞ腹黒ある無頼子と共に世を渡るを願へ。別室を構
 と妾を置王。往と老母小事へん。然も尼と成る勝り。大娘
 福の代と後悔を述べ。異日と云約をちむ。歸るを翌日衆輿を遣り
 と姜女を乗と歸らし。母門外立迎と跪と拜と。女ハ地伏し
 と大娘哭も。大娘之を勸と酒をちと。歡をち。福を案の側坐
 せむ。大娘爵を執と。言と曰我苦争へ。自を利する非む。今
 弟過を悔。貞婦復還る上。簿籍を渡し。やあらせん。我一身を以と
 来つらむ。仍一身を以と。玄と云。文婦席を紀容を改て。拜
 一泣と止む。大娘夫婦が止むる。任せと。止するも居ける。月夜怪と

と禄が寛の頭とさう命下り。數日あるごとく田宅悉故主の還りぬ。魏大駭と其故を知む。自術の復施を乞ふるの無を恨む。時よ思ふも西鄰の火あやしく焚出ぬ。魏火を放みよ托しと往と暗小。禄が家の火をつけく焚んとも。風暴起り延焼しと大方焼盡せり。止福が居阿三屋を餘せる。家拳と其中小取取りとぞ居る。斯る程ぬ禄歸來とさる。皆く相見と泣喜るの甚。初め范公子離書を得と。蕙娘の見せると入。蕙娘痛哭と引裂と地の廢り父其志小從と。復嫁を言むとわりの禄歸と女のさぞ嫁せむと悦みと喜と岳の所小往ぬ。公子其家の焚と成知ると留んとまも共禄辞しと返死。帰ぬ大娘幸小蓄と金わるとさる。敗る堵をつくらんと福鋪。

を負く自營菜くとく。鏝を埋し害小掘わとぬ。夜弟と共小之を發け。石池一丈計のひと盈貯へるとる。是小由と工小命とく大又樓舎を作る。壯麗あるるの類あり。禄と將軍の義小感と十金をそ又と往と父を贖へんと。福我あそ住めとく。清と出立けと。健る僕を添と遣る。禄ハ蕙娘を迎へと。昔の如く睦しと居り。我むとわむと。父兄同く歸り来ぬ。門の款び言ふ。愚思る。大娘母の家小引致せると。我子を禁と来るるのあやうしむ。私わらん人と人の疑へんる。恐と父既小歸ると堅く辯しと去らんと云へど。兄弟之を聽者あり。父乃辯を云小折と。二を兄弟小與一を大娘小與ふ。大娘固辯しと。受とさる。兄弟はと曰。吾等姉のたはさる。争今日。

小依^よ尸^し牢^{らう}入^い之^の食^じ事^じ能^{のう}へ^ど主人^{しゆじん}草^{くさ}と^と簷^{えん}下^か小^{せう}籍^{せき}と^と臥^ふす^む花^{はな}犬^{けん}
 日^ひと^と小^{せう}飯^{いひん}を^を啣^{くは}す^む往^ゆと^と吐^はす^む之^のを^を飼^かひ^む夜^よを^を其^{その}側^{そば}小^{せう}臥^ふす^む白^{しろ}犬^{けん}死^し小^{せう}け
 け^け主人^{しゆじん}之^のを^を山^{やま}の^の麓^{ふもと}に^に埋^うる^む其^{その}傍^{そば}に^に花^{はな}犬^{けん}朝^あ夕^{ゆふ}往^ゆと^と其^{その}處^{ところ}を^を遠^{とほ}る^むの^の救^{すく}廻^{まわ}す^む
 位^ゐと^と拜^ひする^むと^と年^{とし}々^々あり^{けり}其^{その}傍^{そば}に^に臥^ふす^む時^{とき}を^を移^{うつ}す^む返^{かへ}り^{けり}亥^けと^と取^とり^{けり}

尾定

奇説排門録卷之四了

五

六

